

Title	認知心理学はどこへ行く? : 発生的認識論と認知心理学研究(4)
Sub Title	Where does cognitive psychology go ?
Author	中垣, 啓(Nakagaki, Akira)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1995
Jtitle	哲學 No.98 (1995. 1) ,p.141- 170
JaLC DOI	
Abstract	In a series of our papers, we have analyzed the psychological view of Y. Saeki who was one of the most famous and influential cognitive psychologists in Japan. Particularly, we have examined critically the validity of his ideas and models for understanding deeply, his viewpoint theory and his interpretation of domain specificity and found that his practice was a theorization of novices' common knowledge. However many cognitive psychologists in Japan, including eminent ones, fail to recognize the nature of his practicing and appreciate highly his researches, supporting his theories and models in cognitive psychology. In this paper, we examined why they fail to read the true nature of his research. Comparing cognitive psychology with genetic epistemology that has the same research objects as the former, we pointed out that there is no common research paradigm in cognitive psychology and interpreted this paradoxical situation in terms of paradigms. Moreover we described three tragedies of cognitive psychological researches in Japan, caused by the absence of paradigms. Finally, we proposed a possible strategy to get out of this unusual situation.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000098-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

認知心理学はどこへ行く？

——発生的認識論と認知心理学研究（4）——

中 垣

啓*

Where Does Cognitive Psychology Go?

Akira Nakagaki

In a series of our papers, we have analyzed the psychological view of Y. Saeki who was one of the most famous and influential cognitive psychologists in Japan. Particularly, we have examined critically the validity of his ideas and models for understanding deeply, his viewpoint theory and his interpretation of domain specificity and found that his practice was a theorization of novices' common knowledge. However many cognitive psychologists in Japan, including eminent ones, fail to recognize the nature of his practicing and appreciate highly his researches, supporting his theories and models in cognitive psychology.

In this paper, we examined why they fail to read the true nature of his research. Comparing cognitive psychology with genetic epistemology that has the same research objects as the former, we pointed out that there is no common research paradigm in cognitive psychology and interpreted this paradoxical situation in terms of paradigms. Moreover we described three tragedies of cognitive psychological researches in Japan, caused by the absence of paradigms. Finally, we proposed a possible strategy to get out of this unusual situation.

筆者は一連の論考（中垣 1987a, 1988, 1992, 1993）においてもっぱら佐伯胖氏の所論を批判してきた。本論文はその最終回に当るものであると同時に特別な位置づけを持つものである。

一連の論考を公表する中で、何人かの認知心理学者から「あの佐伯批判は面白かった。まだ続きがあるのですか」とか「佐伯批判なんかしないで、御自分の研究をしたらどうですか」といった感想をいただいた。いずれも好意的に意見をして下さったことは十分承知しつつも、筆者には気掛りな点が1つあった。それは「一連の論考は佐伯批判を目的としている」と誰もが受け取っていたことである。しかし、これらの論文は、その副題が明確に示しているように、当初から認知心理学批判を意図しており、佐伯批判を目的とするものではない⁽¹⁾。確かに、佐伯批判を認知心理学批判のための戦術的目標として採用した筆者にもそのような誤解を招いた責任の一端はあろう。本論文はこのような誤解を解き、本来の戦略的目標としての認知心理学批判を展開することである。

とはいえ、筆者は認知心理学とは別の世界で生きてきた人間であり、その歴史や動向に通じている訳ではないので、認知心理学批判を全面的に展開する資格も力量もないことを十分自覚している。また、ここで扱う問題は心理学プロパーの問題ではなく、むしろ知識社会学あるいは科学哲学で扱われるべき問題であり、明らかに筆者の守備範囲を越えている。しかし、下記において〈認知心理学研究におけるパラドックス〉と呼ぶものは筆者にとってあまりにも素朴な疑問であって、自らの力量や資格をも顧みずそれに対する筆者なりの回答を考えずにはいられなかった。従って、以下の所論はこれまでの一連の論考とは逆に、議論の厳密さや実証的裏づけの確かさには囚われることなく、大所高所から筆者の意見を述べる。読者も議

(1) なかには、波多野誼余夫氏のように筆者の一連の論考を「佐伯胖研究」（氏自身の表現）と呼ぶ者さえいた。あたかも認知心理学者としての氏自身とは何のかかわりもない論考であるかのように。

論の粗雑さや実証的裏づけの欠如を指摘することに目を奪われて、議論の主旨を見失わないようにしていただきたい。もし、読者が筆者の解釈に同意できないのであれば、この論文のあらさがしをするのではなく、むしろ、ここでいう認知心理学研究のパラドックスを自分ではどう解くのかを積極的に提言していただければ幸いである。もっとも、筆者の指摘する異常事態を異常事態として認知しえないのであれば、筆者としてはお手上げという他はないが……。

I 認知心理学研究におけるパラドックス

1 佐伯氏の納得論、視点論、領域固有性論を検討して明らかになったことは、その研究テーゼの謬見、その研究内容の空虚さ、その研究方法の自閉性であった。われわれから見れば、佐伯氏は認知心理学の研究者というより、むしろ、認知心理学研究の被験者である。現在 everyday science が認知心理学における流行りのテーマであって、物理現象や生命現象に関する素人 (novice) の認識が everyday physics や everyday biology として盛んに研究されている。それに倣って言えば、佐伯氏の諸論文は氏を被験者とする everyday psychology の格好のプロトコルとなっている。要するに、ズブの素人が認知過程を内省したらどう見えるかに関する 1 種の内観報告なのである。

しかし、ここでは佐伯氏の研究に改めて評価を下すことが目的ではない。問題はこのような佐伯氏の研究が認知心理学者の内部で如何に評価されたかである。佐伯氏は、認知心理学者の間では、自分達の評判を落してくれる鼻つまみ的存在だったのであろうか。また、佐伯氏の研究は玉石混交の認知心理学諸研究の中で石コロ研究に属していると評価されていたのであろうか。とんでもない！ 全くその正反対である。佐伯氏は日本の認知心理学における指導的研究者であり、氏の研究は認知心理学の最先端を行く第 1 級の研究なのである。この評価は決して筆者の勝手な憶測ではない。

佐伯氏と並ぶほど有名な認知心理学者である波多野誼余夫氏は「佐伯氏のいう意味づけ特に心的モデルの構成による納得の過程などは、内生的知識獲得の好例」（波多野 1982a）であるとして、佐伯氏の納得のモデル作りを称賛している。また、4 枚カード問題の難易度の規定因として、与えられた規則の対偶が「われわれの既有知識にてらして納得のいくものであるか否かが、決定的に重要だ」（波多野 1982b）として、佐伯氏の 4 枚カード問題解釈と実質的に同じ考え方を述べ、小学校 1 年生でもこの問題に正答するという佐伯氏の指摘に何の疑問も示さず、氏の視点論的説明を有望な仮説として積極的に評価している（波多野 1982b）。さらに、思考の領域固有性に関しても佐伯氏と同じ趣旨で佐伯氏に劣らぬ程それを強調している（波多野 1982c）。つまり、波多野誼余夫氏も認知に関して佐伯氏とほとんど同じ考え方を述べつつ、佐伯氏の研究を高く評価していたのである⁽²⁾。多くの優れた研究業績をものし、海外でも活躍できる数少ない認知心理学者の 1 人である波多野氏にしてこの評価なのであるから、ましてや他の認知心理学者の評価は推して知るべしであろう。

さらにもう 1 人の代表的な認知心理学者に登場していただく。戸田正直氏は『認知科学の方法』（佐伯 1986b）の補稿において、自分も佐伯氏と同じメタ理論を共有していることを表明した上で、「佐伯氏ほか少数の人たちのように、タテの学識（もちろんヨコも含めて）を立派に身につけた上で、同時に素晴らしい自分のスーパースキーマを育てあげた達人たちもいる」（戸田 1986）と認知科学の“研究者”としての佐伯氏を手放しに絶賛

(2) 正確を期して言えば、現在では波多野氏は佐伯氏の研究を評価していない。しかし、結論のところでも指摘するように、佐伯氏を評価する認知心理学者が誰もいなくなったとしても筆者の指摘する問題点は何 1 つ解決されないものである。また、波多野氏としては、佐伯氏の研究を評価しなくなったのは、単に佐伯氏の研究の質が昔は高かったが時とともに低下したと判断しているからなのか、それとも、研究評価の視点をかえたからなのか、その点をはっきりさせるべきであろう。

している。戸田正直氏は人も知る初代日本認知科学会長である。認知科学会の元会長にしてこれだけの評価をしているのであるから、ましてや他の認知心理学者の佐伯氏に対する評価は推して知るべしであろう。

そこでわれわれとしては次のような問題を提起せざるを得ない。

素人の床屋談議でしかない佐伯氏の所論がなぜ認知心理学の最前線を行く第1級の研究であり得たのか、また、有能な認知心理学者でさえ、なぜその所論の問題点に皆目気がつかなかったのか？

この問題こそ日本の認知心理学研究における最大のパラドックスである。この問題を提起したいがために、われわれは佐伯流“研究”の実体を執拗なまでに解明してきたのであり、筆者の納得論批判、視点論批判、領域固有性論批判はそのための下準備に過ぎなかったのである⁽³⁾。その解明過程で明らかになったように、佐伯氏の所論が謬見と空論に満ちているという問題点を越えて、納得論における物理的にあり得ないモデルの提示、誤りを

- (3) ある高名な認知心理学者から、(佐伯さんの所論が正しいかどうかは別として)「あなたがこれだけ熱心に佐伯さんを批判するのも、佐伯さんの魅力というものです」という趣旨のお便りをいただいた。御本人としては大なる皮肉をいったつもりなのであろうが、今や、このような指摘が如何に的はずれなものであるかが御理解いただけるであろう。筆者は佐伯氏の所論に魅力を感じて批判したのではない。佐伯氏一人があんなことを言って得意がっているのであったら、阿呆らしくて批判する気になれなかったであろう(このことは、一連の論考の冒頭に毎回つけた小文からお分りいただけるであろう)。ところが、まわりの認知心理学者を見渡してみると、お便りをくれた御本人も含めて誰も彼もが認知心理学研究者としての佐伯氏を賛嘆と畏敬の念をもって眺めているではないか！ これはいったいどうしたことか！これが筆者の問題の原点なのである。いきなり、大所高所から認知心理学批判を展開しても、「立場の違う人だから」ということだけで一蹴されてしまうであろう。そこで、とりあえず佐伯氏の所論の問題点を認知心理学者に分ってもらうことから一連の認知心理学批判を始めねばならなかったのである。

指摘された後でさえそれを認めないという知的傲慢さ（中垣 1987a）、視点論における実験手続きやデータの改竄（中垣 1988）、領域固有性論における Borke 研究の盗用（中垣 1992）等は学問研究における 1 種のスキャンダルであった。まともな学問分野であれば、研究者としてやっていくことさえできない程の大事件であるのに、認知心理学の内部においては誰も問題とする者がいない。また、佐伯氏は学会誌に投稿した実証的研究は、筆者の知る限り 1 本もない（但し、第 3 著者として名を連ねている鈴木他 1991 は除く）のに、『認知科学の方法』（佐伯 1986b）を書いたり、学会誌の投稿論文の審査委員をしたりしても、認知心理学の内部においては誰も異常な事態であると思う者がいない。あまつさえ、佐伯氏は認知科学会の前会長（1991-1992 年度）である！これをパラドックスと言わずして何と言うのであろうか。このパラドックスの解明こそがわれわれの最終目標である。

ここで注意しなければならないのは上記のような異常事態を招いた責任は佐伯氏にはないという点である。佐伯氏の数々のスキャンダルは佐伯氏個人の問題ではあっても、それをスキャンダルとして認知しえない、あるいは、認知しても公には指摘できないという状況⁽⁴⁾は佐伯氏と同業の認知心理学者の問題である。まともな実証的研究をしたことがない者が認知心理学の方法論をものにする事になったのは佐伯氏が俺に書かせろと自ら名乗り出たからではなく、認知科学選書編集委員たる認知科学者がその執筆者として氏が相応しいと判断したからである。学会誌に一度も投稿し

(4) 筆者は一連の論考で、佐伯氏の所論の誤り、あらゆるタイプの誤りを数限りなく指摘した。その中には、本来なら研究者としてスキャンダルとなるような重大な誤りが幾つもあった。にもかかわらず、筆者の知るかぎり今日に到るまで、認知心理学者は誰一人として一度たりとも佐伯氏の所論を批判した者がいない（勿論、証拠に残らない発言としてではなく、文書として記録に残るような形で）。この驚くべき知的退廃は認知心理学研究の実態を非常によく映し出している。

たことのない者が学会誌の投稿論文審査委員を務めるのは佐伯氏が俺に審査させろと自ら名乗り出たからではなく、前編集委員が氏を審査委員として適任であると推薦したからである。研究内容の深化発展という意味で認知科学に何1つ寄与したことのない者が日本認知科学会の会長たり得たのは佐伯氏が俺にやらせろと自ら名乗り出たからではなく、認知科学会役員たる認知科学者が日本の認知科学を代表する人物として相応しいと判断し氏を選出したからである。つまり、ここでいう認知心理学のパラドックスは佐伯氏個人に由来するのでは全くなくて、認知心理学者という研究者集団、あるいは、認知心理学研究そのものの有様に由来しているのである。

II 認知心理学とパラダイム

1 それでは、認知心理学のパラドックスは如何に解明されるのであろうか。このパラドックスの生ずる所以については様々な理由が考えられよう。しかし、どの理由を取り上げても、その理由の理由を問い詰めて行くと結局は唯一の根本的理由に帰着するように思われる。その根本的理由とは〈認知心理学には共通のパラダイムがない〉ことである（ここでパラダイムというのは現象を捉える際の知的準拠、あるいは、現象記述における基本的前提といったものを指す）。勿論、各問題領域において沢山の理論やモデルが提唱されていることは十分承知している。しかし、認知心理学を認知心理学たらしめている、人間の認知に関する根本的テーゼが存在しない。認知の諸現象を認知心理学的事実として捉えるための根本的発想法が存在しない。おそらく、「認知心理学のパラダイムは情報処理的アプローチだ」と反論する者がいるであろう。一部の認知心理学者にとっては確かにそうであろう。しかし、そう反論する人であっても、「情報処理的アプローチが認知心理学者の間で共通のパラダイムとなっているか」と問えば、誰でも否定的に答えざるを得ないであろう。しかも、「認知心理学のパラダイムは何か?」と問われて「情報処理だ」と答える認知心理学者であっ

てさえ、情報处理的パラダイムに自覚的に則って自分の研究を進めている者は極く少数であろう。少くとも日本の多くの認知心理学者についていえば、情報处理的アプローチは自らの研究活動を律する規範的統制力を持っておらず、実体の伴わない単なるお題目に留まっている⁽⁵⁾。

2 認知心理学が共通のパラダイムを持たないということは認知科学会長であった佐伯氏も戸田氏も認めていることである。佐伯氏は「バラバラな概念や理論，方法論が内部で乱立している認知科学がかりうじて『まとまり』を保てるのは，行動主義という共通の『敵』が存在しているおかげだとさえいえなくもない」（佐伯 1988）と指摘し，認知心理学は反行動主義というネガティブな規定においてまとまっているだけで，ポジティブな規定において認知心理学を学としてまとめあげるパラダイムが何1つないことを白状している。また，戸田氏も「自分のメタ理論の核（ここでいうパラダイム）は自分で獲得するものであって，勉強によって学習するものではない」⁽⁶⁾（戸田1986）という。これは各自が自分のパラダイムを持てということであって，認知心理学には共通のパラダイムがないということの裏返しの表現に他ならない。

3 佐伯氏や戸田氏の発言をもって認知心理学にパラダイムがないことの

(5) この点で興味深いのは，佐伯氏もまた自分の研究は情報处理的アプローチだとしていることである（佐伯 1986b）。佐伯氏の“研究”の一体どこが情報处理的だというのであろうか。このことは，教科書的知識としてそういうことにはなっているけれども，情報处理的アプローチが自分の研究を方向づける指導原理には全くなっていないことを示している。

(6) この指摘は物理学や生物学の研究者が聞けば，耳を疑うような主張であると同時に，元認知科学会長としてはあるまじき発言である。元会長としては，本来，「認知科学にはこれだけの優れたパラダイムが用意されています。だから安んじてそれを勉強によって学習して下さい。そうすれば，あなたの将来には必ずや豊かな研究成果が約束されますよ」と言うべきなのである。ところが，戸田氏は，認知心理学が誇るべきパラダイムを持たないことを図らずも堂々と宣言しているのである。

証拠とする訳にはいかないであろう。そこで誰もが認めざるを得ないもっと客観的な証拠を指摘しよう。それは誰が認知心理学者であり、どんな研究が認知心理学研究なのかを判断する共通の基準がないことである。「私は認知心理学者です」と本人が言えば、認知心理学者となり、「この研究は認知心理学研究です」と本人が言えば、認知心理学研究となるのが現状である⁽⁷⁾。これは認知心理学が寛容であるからではない。パラダイムがあれば、それに固有の概念装置や研究方法によってそのパラダイムに則った研究かどうか識別可能であるが、認知心理学には共通するパラダイムがないため、認知にかかわる研究なら何でも認知心理学研究になってしまう結果である。

また、認知について研究している任意の研究者を取り上げて、「この人は認知心理学者ですか」と問うても、それを判定する共通の基準を認知心理学者は持ちあわせていないであろう。パラダイムのある学問であれば、その研究者となるにはそれに固有の概念装置や研究方法を学ぶために、少なくとも、数年間の訓練期間を必要とする。しかし、認知心理学にはパラダイムがないので、認知心理学者となるために特別な訓練を必要としない。そのことは、認知心理学では、専門家と素人との区別がないことに端的に表われている（勿論、それで職を立てているかどうかという外的な区別は可能だが）。パラダイムに固有のジャーゴンを学ぶ必要がないからである。あるいはまた、かつて発達心理学者とか知覚心理学者として人間の認知について研究していた者が、日本に認知心理学が導入されるやいなや、これまでの研究態度を何1つ変えることなく、認知心理学者を名乗っても誰一人奇異に受け取る者はいなかったし、今日でも認知心理学者として立派に

(7) 例えば、波多野諄余氏は認知心理学者である。なぜなら氏が情報処理のパラダイムに立っているからではなく、氏がそう自称しているからである。それに対し、筆者は認知心理学者ではない。なぜなら、筆者が発生的認識論のパラダイムに立っているからではなく、自分がそう自称していないからである。

通用することにも表われている⁽⁸⁾。これは認知心理学が寛容であるからではなく、認知心理学を認知心理学たらしめているパラダイムが存在しないので、認知について研究している者は誰でも認知心理学者となることができるからである。

III パラダイムなき研究の悲劇

1 認知心理学がパラダイムを持たないことから帰結する第1の悲劇は、認知に関する理論やモデルが妥当かどうか、あり得る仮説かどうかを判別する指針を認知心理学者が持ちあわせていないことである。勿論、理論(モデル)の妥当性は事実がそれを支持しているかどうかによって決まる。しかし、現実には、すべての事実が理論を支持していることはまずなく、どんな理論にも幾つかの反例が存在しているのが普通である。このとき、支持的事実を優先させて理論を採用するか、それとも反例を優先させて理論を棄却するかを判断すべき指針はパラダイムが与えるのである。しかし、認知心理学にはパラダイムが存在しないため、そうした指針がなく、認知に関するどんな仮説を立ててもそれが積極的に支持されるかどうかは別にして、1つのあり得る仮説として承認される。こうして、佐伯氏のような所論でさえ、認知心理学の内部では生存権を得るのである。

しかし、これだけでは佐伯氏の所論がなぜ多くの認知心理学者から支持

(8) 1960年代から1970年代にかけてピアジェ課題を盛んに研究していた発達心理学者は1980年代に入るとこぞって認知心理学者になってしまった。彼らは発生的認識論のパラダイムから認知心理学のそれへとパラダイム変換した訳ではない。もしそうであるなら、信仰告白にも似た知的苦悶が伴うはずであるが、そういう人達の発言や論文にはそのような形跡は全くといってよい程見られない。発達心理学者から認知心理学者に看板を掛け変えただけの話なのである。このことも認知心理学がパラダイムを持たないことを示す1つの証拠である。

されたのかは説明できない。その種と仕掛けを知るためには、佐伯流“研究”の本質を明らかにしなければならない。即ち、佐伯流“研究”なるものはいわば常識をパラダイムとする everyday psychology なのである。そのことは、氏が生態学主義と擬人的認識論をメタ理論とすることにも端的にあらわれている（佐伯 1986a）。即ち、われわれから見れば、生態学主義とは生（なま）の経験への直接的調節であり、擬人的認識論とは自我に属するものを対象に投影する自己中心的同化に他ならない。いずれも無反省的な常識がもつ根強い心的傾向なのである。また、佐伯氏が「常識的に見てもっともであること」、「常識とのつきあわせによる吟味」をあれほど強調する（佐伯 1986a, 1988）のも、常識以外に有効なパラダイムを持ちあわせていないことの表明に他ならない。こうして、everyday psychology に被験者として従事する佐伯氏の所論は当然のことながら、常識にもっともらしく理論的体裁を施したものにならざるを得ない。このことは常識に照して「“plausible である”と認定できるかぎり、それはそのまま“科学的である”と言いかえてもよさそうである」（佐伯 1983a, p. 24）と言うように、佐伯氏自身自覚的に認めていることである。佐伯氏にとって“科学的である”ということは“常識的に見てもっともらしい”ということなのである。だからこそ、佐伯氏は理論や事実をあえて犠牲にしてまで所論のもっともらしさを装うことに最大限の努力を払うのである。

ところで、一般の認知心理学者は何を指針にして理論（モデル）の妥当性を判断しているのであろうか。パラダイムがないからと言って認知心理学者は判断を停止する訳ではなく、個人的には理論の妥当性を絶えず判断しているし、何らかのあり得る仮説を立てないことには研究をやって行くことはできないであろう。そのとき、認知心理学者が識らず識らず研究上の指針としているのがこれまた常識なのである。認知心理学者が佐伯氏の所論の妥当性を判断するとき、準拠すべきパラダイムがないので、自分の常識に頼らざるを得ない。ところが、一般の認知心理学者も佐伯氏と同じ

常識を共有している以上、常識の理論的体裁化である佐伯氏の所論に“納得”せざるを得ないのである！ その所論が現実よりもなお一層もっともらしさを装っているため、単に納得するということを越えて、その plausibility に感嘆し、佐伯教の信者になる者さえ出現する。さらに仕末の悪いことに、たとえ、佐伯氏の所論が不完全であったり、不整合であったりしても、その所論は常識を背景としているので、読者自身がよほどしっかりとした見解を持ってないかぎり、説明の空隙は読者の側の常識によって補正され、読者の方で勝手に“分ってしまう”のである。これこそ、認知心理学者が佐伯氏の所論に何の問題点も見い出せないし、それどころか、その所論が極めて説得力のあるものとして高く評価される秘密なのである。

佐伯氏の所論が常識の理論的体裁化であるということが、佐伯氏やそのグループの者にその所論の反証例をいくらつきつけても、彼らの考えを変えることがないという事実を説明してくれる。例えば、アリストテレス物理学が信じられていた時代に、ニュートン物理学から見ればその反証例とされる運動現象をいくら観察しても、その信念を変えることがなかった。これはニュートン物理学が直観にそぐわない考え方であるのに対し、アリストテレス物理学は日常の実感の理論的体裁化であることに基づいている。2千年以上の時代のずれがあるとはいえ、物理学に起ったことが、今日の認知心理学にも起っている。日常の実感に根差した佐伯氏の everyday psychology はそれほど根強いのである。

筆者もまた佐伯氏と大部分の常識を共有しているので、佐伯氏の所論は筆者にも非常によく分る。概念的に分るという以上に、そう書いた佐伯氏の心情をも含めて悲しい程よく分る。だからこそ、われわれとしては、その考え方が誤っていることを声を大にして指摘せざるを得ないのである。日常の実感に根差した常識的見解の誘惑から脱却し、現象の背後にある本質へとわれわれを導びいてくれるものこそパラダイムの存在である。確か

なパラダイムを持つことが、われわれの研究を方向づけ、有望な仮説を設定する上で如何に大切であるかを具体例で示そう。佐伯氏は大学生にとっても困難な論理的推論でも誰が何のためにやるのかという課題解決者の視点を課題に導入してやれば、小学1年生にも正答できることを示し、それに視点論的説明を与えた(佐伯 1982a)。さて、認知心理学者はこの説明の妥当性をどのように判断したであろう。認知心理学は「6 歳児も 18 歳児も同じ論理的推論が可能かどうか」に関して研究者に指針を与えてくれるようなパラダイムを持ちあわせていない。とすれば、結局自分の常識に頼って視点論的説明の妥当性を判断する他はない。そして、常識に頼って視点論的説明を読む限り、視点論的説明そのものが佐伯氏の常識の理論的体裁化なので、読者はやすやすと佐伯氏の説明に“納得”してしまう。そのため、認知発達を専門としない認知心理学者だけではなく、その専門家でさえ、視点論的説明の問題点を見抜くことができない。実際、多くの認知心理学者(波多野氏のような認知心理学の指導的立場にある人も含めて)が佐伯氏の視点論的説明を確立された理論として、あるいは、有望な仮説として紹介してきたのである。

それに対して、発生的認識論のパラダイムに立つ者なら視点論的説明をどう捉えるであろうか。このパラダイムは論理的操作の漸進的構築を基本的前提の1つとするので「6 歳児が 18 歳児と同じ論理的推論が可能であることはあり得ない」と教える。そこで「もし、小学生1年生でも大学生と同じカード選択を示したというのが本当であるとする、同じカード選択に到る異なる2つの思考プロセスが存在するはずである」という仮説に導かれる。さらに、この仮説を検証するために、「与えられた命題を小学生でも大学生でも同じに解釈しているのか調べてみよ」とか「意味は同じでも質問の仕方を変えて問題を提出して見よ」という研究の方向づけを与えられる。このように、パラダイムの与える指針に従って研究を進めると、研究している筆者自身が驚いてしまう程、見事にパラダイムが予測した通

りの結果を得るのである⁽⁹⁾ (中垣 1987b)。

2 認知心理学にパラダイムがないことから帰結する第2の悲劇は認知心理学に固有の研究テーマがないことである。一般に、パラダイムはその適用によって解くことのできそうな応用問題を研究者に提起する。研究者の主な仕事はそのパラダイムから解けることを約束されてはいるが、未だ解法の知られていないこの応用問題をパズル解きのようにして解決することである (Kuhn 1962)。この応用問題こそ、そのパラダイムに固有の研究テーマとなる。しかし、認知心理学にはパラダイムがないので、認知に関することなら、すべてが同じ資格において研究テーマとなる。

佐伯氏が「わが国における認知科学を『おもしろく』するために、『おもしろい』研究をしている若い研究者に『それはおもしろい、もっとやれ!』といって本を書いてもらったり、自分で編集する本に執筆してもらったり」(佐伯 1993) したと語っているのはパラダイム論から見て極めて示唆的である。どんな研究テーマであっても本人、あるいは、グループの誰かが「これはおもしろい!」と思えば、それだけで認知心理学研究のテーマになり得ることを物語っている。共通のパラダイムが支配する以前の前パラダイムの状況において、研究者はその研究領域に関する事象なら何でもおもしろがり、収集したり記載したがる傾向があることをクーンは指摘しているが (Kuhn 1962)、認知心理学の現状はクーンのいう前パラダイムの状況にぴったり符合している。何でも面白がるという傾向は好奇心が旺盛であることの現われではなく、固有の研究テーマを持たないことの裏返し of 現われなのである。

認知心理学が固有の研究テーマを持たないことからくるもう1つの問題

(9) 日本に認知心理学が導入される以前から筆者は発生的認識論のパラダイムの有効性を知っていたつもりであるが、4枚カード問題やピアジェ課題の認知心理学的研究が盛んになったことが却ってこのパラダイムの威力を実感をもって再確認させてくれたのである。

は、認知に関する解けそうな問題ととても手に負えそうにない問題とを区別する指針がないことである。研究テーマはすべて個人ないしグループの好みの問題であるから、佐伯氏の納得論でさえ、基礎的な認知過程である知覚や記憶の研究と同じ資格において認知心理学研究として立派に通用する。今日の認知心理学では、経験的認識と論理数学的認識、操作的認識と形象的認識、操作的活動としての思考とその所産たる知識、反省的抽象と経験的抽象、帰納的一般化と構築的一般化といった認識過程に関する根本的区別がほとんどなされていない。こうした認知心理学の今日的水準において、最も高次の認知過程たる「納得」を科学的研究のテーマとして取り上げることはどだい無理な話なのである。しかし、佐伯氏はそれが解けそうな問題かどうかを検討することなく、ドン・キホーテの如くそのテーマに挑戦する。筆者は納得論批判（中垣 1987a）を書くために、納得に対して佐伯氏がどのような概念規定を与えているのか、入手できる限りの文献にあたって調べたにもかかわらず、どこにもそれを見い出すことができなかった。唯一それらしきものは「『納得』とはどういうことだろうか？『ナルボトと思えること』というしかない」（佐伯1982b p. 91）という傑作な定義であった。要するに、納得に関する概念規定は何一つせず、それを全部読者の常識に委ねて、どういうときにナルボトと思ったのか、どうすればナルボトと思えるのかという類の議論に終始する。納得に関する常識のまわりを堂々巡りしたあげく、佐伯氏の到達した結論は「わかること」は概念的に分ったり、手続き的に分ったりすることを越えて、課題のおかれている場、場の埋め込まれている生活空間、生活空間の背景にある文化全体にかかわっているというものである（佐伯 1983b, 1986a）。これ自体否定しようもないことだが、「わかること」が何 1 つ分ったことにはならない。碗の中のビー玉の運動は碗の形状にかかわっていることを越えて、碗のおかれている床、床の埋め込まれている家屋、家屋の土台となる地球全体の運動にかかわっていると主張したところで、それ自体否定しようも

ないが腕の中のビー玉の運動を理解したことには全くならないのと同様で、全く空虚な結論である。パズル解きに必要な概念装置も道具立てもなしに無謀な研究テーマに取り組んだとき、空虚な結論に到らざるを得ないという貴重な教訓を佐伯氏の納得論は示している⁽¹⁰⁾。

それでは、「パラダイムから解けることを約束されてはいるが、未だ解法の知られていない応用問題」とはどういうことなのであろうか。発生的認識論のパラダイムに立った場合その具体例を1つ挙げよう。大人を被験者とする4枚カード問題は、その問題をどういう具体的文脈に盛り込むかに応じて、その成績は極端に変動する（以下では、〈主題化効果〉と呼ぶ）。形式的に同型な2つの知的操作課題が全く異なるパフォーマンスを示すという結果は発生的認識論のパラダイムから見れば極めて異様であり、クーンのいう変則例（anomaly）をなす。この変則例をパラダイムの検証例に変えることが発生的認識論の立場に立つ者に与えられた応用問題なのである。ところが、主題化効果に直面して、多くの認知心理学者（有名な人物としては、Rumelhart 1979, Boden 1979, Johnson-Laird 1983, Mandler 1983, Cheng & Holyoak 1985）が思考の領域固有性論を採用した。認知心理学にはこの謎の解法に指針を与えてくれるパラダイムがないので、知的に誠実であろうとすれば、主題化効果という歴然たる証拠にそのまま従った思考の領域固有性という考え方を採用せざるを得なかったのである。しかし、どういう意味で思考が領域固有なのかは、これまた指針とすべきパラダイムがないので、様々な解釈が提唱されている。それぞれの解釈が説明すると称する証拠を見ている限り、どれもこれも常識に照して極めても

(10) しかし、世の中はよくしたもので、一般の認知心理学者は納得のような高次の認知過程にかかわることを敬遠したため、納得論は佐伯氏の独壇場となったことと、教育界では「わかること」に対する社会的要請が極めて強いため、議論の中味をろくに確かめもせず、それについて書いてありさえすれば、争って飛びついたという事情があいまって、そのような空虚な納得論でも教育界では十分通用したのである。

っともらしいが、各解釈の妥当する守備範囲は限定されている。そのため、新しい解釈が提唱されたからといって、古い解釈が否定される訳でもそれが新しい解釈に統合される訳でもなく、どの解釈も仲よく共存することになる。こうして、Wason の 4 枚カード問題の考案以来 4 世半紀経った今日でもスキーマ説、視点説、記憶手がかり説、実用的推論スキーマ説、社会的交換説等々諸説ふんぷんとして一向に決着がつかず、まさに「群盲象を撫ず」が如き観を呈している。これが主題化効果に関する認知心理学的研究の現状である。

それに対し、発生的認識論のパラダイムに立てば 4 枚カード問題は知的操作課題であるから「主題化そのものの中にパフォーマンスの変動要因を求めてはならない、主題化とともに持ち込まれるもっと形式的な要因に注目せよ」という研究指針を得る。そして、形式的なものが要因なら「抽象的 4 枚カード問題でも高いパフォーマンスを示す場合があるはずであるから、そういう事例を探して見よ」、さらに、ともに形式的なものが要因なら「主題化された 4 枚カード問題も高いパフォーマンスを示す抽象的 4 枚カード問題も同じ要因によって説明できないかどうか検討して見よ」という研究の方向づけを与えられる。この指示に従って研究を進めると主題化効果を典型的に示した伝票課題は Wason の考案した課題のように対比型カードではなく存在欠如型カードを用いていることを突き止め (中垣 1987c)、抽象的 4 枚カード問題にも matching bias による高い正答率を示す事例があることを見出し (Evans *et al.* 1973)、両者の要因を結びつけることによって、4 枚カード問題の主題化効果も従来短絡的反応と見なされていた matching bias も同じメカニズムで説明できる課題変質説 (中垣 1989) を得る。こうして、発生的認識論のパラダイムにおける変則例であった主題化効果はその検証例へと変換され、応用問題としての謎解きが解決されるのである。

ところで、認知心理学には固有のテーマがないからといって、研究者は

認知心理学はどこへ行く？

手を拱っている訳ではなく、どの研究者も何らかのテーマを選択している。その際、最も重要な要因となるのは、個人的な興味、関心を除けば、日本の認知心理学者の場合、英米の認知心理学の研究動向である。研究すべきテーマ設定に内在的に指針を与えてくれるパラダイムが存在しない以上、認知心理学者は外在的指針に頼らざるを得ず、その最も手取り早い方法が英米の認知心理学では何が流行りのテーマであるかを知ることである。その結果、日本の認知心理学は、認知心理学者自身それを認めるように、英米の認知心理学の植民地の様相を呈している。英米で話題となった研究テーマが数年遅れで日本に輸入されて日本の認知心理学者の研究テーマとなり、その問題が解決されないうちに、次の新しいテーマが輸入されてそれに飛びつくということの繰り返しである。そうしたタイプの典型的研究者がこれまた佐伯氏で、Johnson-Laird のメンタルモデル論者になったり、M. Cole を介して Vygotsky の ZPD 論者になったり、Dreyfus を介して Heidegger の解釈学的現象学者になったり、Gibson のアフォーダンス論者になったり、実に忙しい。われわれが滑稽に思うのは、これらのテーマやその背景にある理論はお互いに整合するとは思われないのに、そういうことには一向にお構いなしに、しかも、それらのテーマに関して自分では実証的研究を腰を落着けてすることなく、次々と新しいテーマを輸入してはそれを滔々と論ずるのである。そして、古いテーマは何の解決も前進もないまま「過去のお話」になってしまう。研究に値するテーマを内在的に提起すべきパラダイムがないので、英米の研究テーマを次々と追いかける他はなく、科学的研究としての蓄積がないまま日本の認知心理学研究が推移していくという悲劇がこうして生まれるのである。

3 認知心理学にパラダイムがないことから帰結する第3の悲劇は研究の価値を評価する内在的な基準がないことである。もし、パラダイムが存在すれば、そのパラダイムによって提起される応用問題の解決に当該の研究がどれだけ寄与したかによって論文の評価が決まる。しかし、論文の内在

的価値を規定するパラダイムがないとなると、研究の評価は何らかの外在的な基準に頼らざるを得ない。実験計画や論旨の整合性は論文審査の基準にはなり得ても、研究内容にかかわる価値基準にはなり得ないだろう。そのため、認知心理学における研究の価値評価基準は、〇〇大学の教授の研究であるから、〇〇科学会の役員をしている人の研究だから、〇〇科学選書の編集者の研究だからといった最も外在的なものに識らず識らずのうちに傾いて行く。認知過程に関する新しい発見や謎解きに何1つ寄与したことがないにもかかわらず、佐伯流“研究”が日本の認知心理学の中では、学界の最先端を行く第一級の研究としてまかり通るという世にも不思議な現象の根本的理由は認知心理学が研究の価値を内在的に判定する基準を持ちあわせていないからであり、研究価値の外在的評価基準において佐伯氏が最も優利な立場にいるからである。

日本の認知心理学は、研究価値を内在的に判定する基準を持っていないこととその研究姿勢の植民地性とは結びついて非常に奇妙な現象を呈している。第1に、英米の認知心理学研究ならなんでも有難がる傾向である。筆者が特に事情が分るのはピアジェ批判関係の研究で、Gelman 1978 や Donaldson 1978 におけるピアジェ理解およびその批判が日本の認知心理学者の間では共通理解として定着している。しかし、Gelman や Donaldson らの研究は、われわれから見れば、Piaget の文献を本当に読んだことがあるのかどうかを疑わしめる程、次元の低いピアジェ批判である。日本の研究者の中にももっとまともなピアジェ批判者がいるのにそういう研究には目もくれず、英米の認知心理学者のピアジェ批判を盲目的に受け入れるのである。その驚くべき盲目ぶりは、ピアジェを批判しながらピアジェ自身の研究文献をまともに読むことをしないという認知心理学者の態度に典型的に現われている。英米の認知心理学者がそう言っている以上、それが本当かどうかを確かめる必要を感じない程、植民地根性が日本の認知心理学者に染み付いているのである。こういうタイプの代表的研究者が、これ

認知心理学はどこへ行く？

また、佐伯氏であって、氏がピアジェに対して信じられない程の無知、無理解を示しながら、認知心理学の内部では何ら問題とされることがないのは、日本の認知心理学者のピアジェ理解が佐伯氏のそれと同水準であるという背景があるからであり、ピアジェのような英語圏以外の研究者を理解するにも、英米のピアジェ研究文献を通してしかそうしようとししない英米一辺倒の植民地根性が土壌となっているのである。

第2の奇妙な現象は日本の認知心理学者の研究者としての評価が英米の認知心理学の現在の研究動向にどれだけ近いところにいるかによって決まるという傾向である。本来、研究者としての評価はその人があげた研究成果によって判定されるべきものなのに、認知心理学者はその成果を内在的に評価する基準を持たないので、日本の場合、英米の研究動向を基準にして研究者が評価されることになる。そのため、日本の認知心理学者は英米の最先端の研究動向を紹介しつつ、自分がそうした研究動向に如何に近いところで研究しているかを争って示そうとする。こういうタイプの代表的研究者が、これまた、佐伯氏である。認知過程に関する研究で何1つ成果を上げたことがなく、学会誌に投稿された実証的研究が何1つないにもかかわらず、認知心理学の内部では研究者として高い評価をうけ、日本の認知心理学の指導者であり得るというパラドックスは、佐伯氏が今日に到るまで常に英米の認知心理学の最先端の研究動向を紹介しつつ、それとの関連で自分の研究を位置づけてきたからであり、英米の研究動向からの近さによって研究者を評価するという日本の認知心理学者の悲しい体質があるからである。佐伯氏は本質的には研究者ではなく、英米の認知心理学の輸入業者なのである。もし、佐伯氏が輸入業者に徹していたならば、英米の認知心理学の紹介者として氏の貢献をわれわれも認めたであろう。ところが、仕末の悪いことに、佐伯氏の場合、英米の認知心理学という本場ワインを輸入しつつそれに自家製の粗悪ワインをブレンドした上で、あるときは、オリジナルなワインと偽って、あるときは、本場ワインにさらに良質

の自家製ワインをブレンドしたと称して日本の認知心理学者に売り出すのである。そういう事情を知らない多くの、特に、若い認知心理学者は、佐伯氏の論文を読んだとき、前者の場合には（例えば、三山問題、4枚カード問題の視点論的説明や数保存課題の場ちがい説）「おおっ、すごい！ 佐伯氏は英米の認知心理学者も言っていないようなオリジナルな解釈を提出している」としきりに感心し、後者の場合には（例えば、A. Tversky & D. Kahneman の「簡便法的合理性」や K. VanLehn & J. S. Brown の計画ネット理論に関する佐伯氏の紹介と評価、佐伯 1986b および佐伯 1982c）「おおっ、すごい！ 佐伯氏は英米の認知心理学の最先端の研究に通じているだけではなく、その理論の限界や問題点まで指摘している」と手もなく脱帽してしまう。

認知心理学が研究を評価する内在的基準を持たないという点は若い研究者にも多くの悲喜劇をもたらしている。若い研究者の場合はもちろん大学の教授であったり、学会の役員であったりすることは不可能なので、そういう人達の研究は学会の主流を行く指導的研究者の研究を発展させたものであるとか、指導的研究者のお気に入りのテーマを扱っているとか、あまつさえ、〇〇先生の弟子の論文であるからという理由で評価されていく。これは実際にあった話（1990）であるが、ある地方の若手の研究者が学会発表の前に知り合いの、これまた若手の研究者に論文を読んでもらったところ「〇〇さん、この考察はちょっとマズイですよ。何というか……、いわゆる『流行』じゃあないんですよ。〇〇大の〇〇さん（ここに、佐伯氏の弟子の名前が入る）を御存知ですか。この考察じゃあ、彼と激論になってしまいますよ」と忠告されたと言う。これは1つのエピソードに過ぎないが、若手の研究者が置かれている現状、学界の雰囲気や敏感に感じとって研究結果の考察や研究評価をせざるを得ない現状を端的に示すものである。こうして、認知に関するまともな若手研究者の研究が認知心理学研究のはやりの解釈ではないということだけで無視され、佐伯流認知心理学研

認知心理学はどこへ行く？

究なるものが跳梁跋扈するのである。勿論，どんな学界でもその指導的研究者の顔色をうかがうという傾向は多少とも存在するであろう。しかし，認知心理学はパラダイムなきヌエ的科学であるため，極めて質が悪い。というのは，認知心理学に参入するのにパラダイムを学ぶための特別な訓練を必要としないし，その代りになる常識は学生でも持ちあわせているので，すぐにでも認知心理学研究者になれるからである。このことと認知心理学に固有の研究テーマがないこと，および，研究価値の内在的基準がないこととが結びついて，研究者としての有能さとは無関係に，たまたま指導的研究者と個人的な関係にあったり，その人の意向をくんだ研究に従事する若手の認知心理学者が研究者として高く評価される傾向が著しく強いのである。まともで有能な若手研究者が有力な研究者と個人的つながりがないということで評価されず，佐伯氏に輪をかけたような小佐伯氏（佐伯氏の得意な「小びとの派遣」!）が拡大生産されて行く有様を見ていると，暗澹たる気持にならざるを得ない。佐伯氏が大学においても学界においても重要な地位を占めているだけになおさら悲劇は大きくかつ深刻なのである。

IV 結 論

1. 認知心理学が共通のパラダイムを持たないことから帰結する3つの悲劇を指摘し，それとの関連で認知心理学研究のパラドックスの解明を試みた。筆者は認知心理学の研究動向によく通じている訳ではなく，自分の研究との関連で認知心理学の現状を覗き見るだけである。従って，前節の議論は粗雑であり，筆者の独断と偏見がいたるところに散在しているであろう。しかし，細部において筆者の誤解や間違い，不正確な記述や不適切な表現が多々あるにしても，議論の大筋は正しいと信じている。もっとも，発生的認識論のパラダイムに立つ者から，以上のような「悲劇」を指摘されても，認知心理学者にとっては犬の遠吠えのようなもので痛くも痒くもないであろう。それどころか，自らのパラダイム（自分の専門領域におけ

る理論やモデルのことではない)を反省したことのない認知心理学者にとってはここで指摘しているパラドックスそのものが全く理解できず、「え！認知心理学研究の悲劇？この人どこか頭がおかしいんじゃない」と言われそうである。まさに「赤信号、みんなで渡ればこわくない」である。しかし、たとえ現在のところ、筆者の言わんとするところを理解してくれる認知心理学者が誰一人いなくても言わねばならない。認知心理学の現状は座視するにはあまりにも悲惨である。

例えば、佐伯氏は15年以上に渡って認知心理学“研究”に従事してきた。それでは、佐伯氏はその間どんな研究成果を上げたというのであろうか。今まで分らなかったことで佐伯氏のお陰でようやく解明されたというものが何か1つでもあったらどうか。何1つ研究成果をあげることがない佐伯氏の所論がなんと認知心理学の最前線を行く第1級の研究として評価されたのである！それどころか、有能な認知心理学者でさえ、その所論に支持と称賛を送り、その問題点に皆目気がつかなかったのである！

また、例えば、ピアジェは1941年数保存課題の非保存反応を解釈するに当って、自分の解釈に対して異論(場ちがい説)があり得ることを初めから予期していた。そのため、自らの解釈を展開するだけでなくこの異論を支持しえない論拠と実証的証拠を幾つも提出している。ところが、そうした事情を全く知らないで、50年後再び場ちがい説を独自の解釈であるかのように提唱し、その立場からピアジェの解釈を批判する認知心理学者がいるのである！しかも、こうしたスタイルのピアジェ批判研究が認知心理学の最前線を行く研究として流行し、事の真相を語れる認知心理学者は誰一人いないのである！

また、例えば、Wasonは1966年4枚カード問題を提出した(Wason 1966)。4枚カード問題はもともと仮説演繹的思考を調べるために考案されたにもかかわらず、認知心理学者は人間の仮説演繹的推論能力の方を検討しないで、その主題化効果ばかりを調べようとした。つまり、そもそも初

認知心理学はどこへ行く？

めから解決を約束されないような問題の立て方をしていたのである！ そのため4枚カード問題の主題化効果に関してこれまで数多くの認知心理学的研究が行われてきたが、その結果何が分ったのであろうか。確かに、多大なデータが蓄積され、研究者の数にも匹敵する解釈が提出された。しかし、それらのデータと解釈が揃うにつれて解決に向けて次第に収斂していくのではなく、むしろ、「研究すればする程わけが分からなくなった」というのが真相であろう！

これが認知心理学研究の実態であり、現状なのである。これを悲惨と言わずして何と言うのであろうか。読者が認知心理学者であるなら、筆者に対する反感は一時的でよいから括弧に入れて、どうかこの実態を直視してほしい。この悲惨な現実を目をそむけないでほしい。

2 佐伯氏より若い世代の中堅の研究者は、おそらく、「あなたの指摘する事態は10年前の話ですよ。若手の研究者ならいざしらず、今では、佐伯氏の発言にまともに耳を傾けるような認知心理学者はいません」というかもしれない。確かに、佐伯氏は今では認知心理学研究の最前線からは退いているであろう。しかし、問題は佐伯氏がかって誤った、あるいは、中味のない所論を展開していたという点にあるのではなく、あれほどの謬見と空論を展開しながら有能な認知心理学者を含めて誰一人としてその馬鹿馬鹿しさかげんに気がつかなかったという点にある⁽¹¹⁾。実際、佐伯氏が最前線から退いたのも、筆者の一連の論考による外圧のためであって、認知心理学者の内部から集中砲火を浴びたためではない。つまり、たとえ佐伯氏が表舞台から完全に退場したとしても問題事態は何1つ変ってないの

(11) 正確を期すと「誰一人も……ない」ではない。筆者の知る限り、佐伯氏の所論の馬鹿馬鹿しさ加減とそれを評価しようとする認知心理学研究の異常事態に気がついていた認知心理学者は安西祐一郎氏唯一人である。それが可能であったのは安西氏も確固とした自分のパラダイムを持っていたからである。それ故、安西氏の存在は、パラダイムを持たない限り、問題事態が何も見えてこないという本論考の論旨を補強するものなのである。

である。佐伯氏のように目立った登場人物が認知心理学研究の最前線にいなかったため、以前より問題事態が見えにくくなってしまっただけのことである。

波多野氏は認知心理学の研究者群を「おもしろ派」と「地道派」とに分け、「おもしろ派」の研究が実質的には何の研究成果も挙げえなかったことを指摘している（波多野 1992）。こういう論考が書かれたこと自体、認知心理学にもようやく反省の萌しが生じたことを示すものであろう。しかし、われわれから見れば佐伯氏に代表される「おもしろ派」の研究が何も生み出さないであろうことは当初から分っていたことである⁽¹²⁾。ところが、波多野氏自身は「おもしろ派」ではなかったにしろ、氏は事実上「おもしろ派」の応援団長を務めていたのである。つまり、問題の本質は「おもしろ派」の研究が何の成果を生み出さなかったことにあるのではなく、なぜ、佐伯流“研究”が成果を生み出さなかったのか、なぜ有能な認知心理学者でさえ佐伯流“研究”の実態を見抜けなかったのかという点である。この点の反省をぬきにして、「おもしろ派」の応援団長から「地道派」の応援団長に乗り換えても問題は何か1つ解決しないであろう。

3. それでは認知心理学者は何をなすべきであろうか。一言で言えば「認知心理学者で共有しうるようなパラダイムを創れ」ということである。しかし、新しいパラダイムを創造するということは「言うは易く、行うは難し」どころか、ほとんど不可能なことであろう。新パラダイムの創造は100年に1度あるかないかの出来事であり、それを現在の認知心理学に期待することはできないであろう。とすれば、既成のパラダイムである発生的認識論を採用せざるを得ない。発生的認識論は現在のところ認識に関する

(12) 筆者は、1984年10月、日児研でのレポーターとしてこのことを既に指摘している。ちなみに、筆者がレポートした日児研の座長は波多野氏であった。従って、波多野氏は認知心理学者としてそのことに気がつく最も有利な立場にいたことになる。

認知心理学はどこへ行く？

る最も包括的で最も整合性の高いパラダイムだからである。しかし、ここで注意してほしいのは、発生的認識論のパラダイムが正しいからそれを採用しろといっているのではない点である。このパラダイムが正しいかどうかはわれわれにも分らない。しかし、たとえこのパラダイムが究極的には間違いであったとしても、一定のパラダイムに立たないことには、何が問題であり、何を解明すべきかという問題事態そのものが見えてこないのである。それ故、データやモデルの単なる蓄積という意味ではなく、何がどこまで解明されたのかという意味での研究の深化発展もあり得ないし、次なる飛躍（新しいパラダイム！）への展望も開けてこないのである。つまり、発生的認識論のパラダイムを採用することは認知心理学が現在とり得る最善の戦略なのである。少なくとも、構造的次元と発生的次元において、発生的認識論のパラダイムを取り入れることが不可欠であろう。

しかし、発生的認識論のパラダイムだけでは認知心理学のパラダイムとしては不十分であろう。というのは、発生的認識論は認識論のパラダイムであって心理学のパラダイムではないからである。認知過程の step by step のプロセスを解明するためのパラダイムが不可欠である。その最も有力な候補は情報処理的アプローチであろう。しかし、このアプローチに通じていない者の私見ではあるが、研究方法論としては既に有効なアプローチであることを認めるにしても、現在のところパラダイムと呼んでよいかどうか大いに疑問である。というのは、このアプローチを採用したからといって、認知に関してどういう仮説を排除し、どういう仮説をあり得るものとするかが見えてこないからである（勿論、内部過程を認めない理論を排除しているであろうが、それはあまりにも一般的すぎて少しも有難味がないでいろう）。情報の解釈によっては石コロだって情報処理していると言えるだろうし、言語記号の操作だけに限定すれば、人間しか情報処理していないということになるであろう。つまり、情報の基体 (entity) となるべきものが明確でないのである。それ故、方法論的に既に有効性の確立さ

れている情報处理的アプローチをパラダイムにまで鍛え上げていくことが今後必要であろう。その暁には、認識の Macrogenesis を扱う発生的認識論とその Microgenesis を扱う情報处理的アプローチとは 2 つの相補的なパラダイムとなるであろう。しかし、2 つのパラダイムが相補的なものとして並存しているだけでは認知心理学の真のパラダイムとしては不完全であり、2 つのパラダイムを如何に統合していくかが認知心理学者の最大の課題となるであろう。将来的にどのようなパラダイムを認知心理学者が構築するにせよ、パラダイムに対する自覚的反省なしに、現在のような認知心理学研究を続けて行くことは、膨大なデータとそれを説明すると称する数限りない理論（モデル）の山に認知心理学は自ら埋没する運命にあるであろう。認知心理学はもうそろそろカーゴ・カルト・サイエンスから脱すべきではないだろうか。

〔完〕

〔あとがきに代えて〕

これで「発生的認識論と認知心理学研究」というタイトルを副題とする一連の論考を終わる。本論考の元の原稿に目を通しコメントを下さった何人かの先輩、同僚、そして、認知心理学者では安西祐一郎氏、市川伸一氏にここでお礼申し上げる。特に、安西氏は原稿の誤字、脱落から事実誤認、説明不足の指摘、さらには、パラダイムや知識に関する意見に到るまで赤ペンによる詳細なコメントをいただき、元の原稿を書き直す上で大変参考になった。安西氏のコメントにどれだけ応え得たか心もとない限りだが、認知心理学批判という、認知心理学者としては読みたくもない論考に正面から応えて下さった安西氏の知的誠実さに改めてお礼申し上げたい。

さらに、ここではお名前を挙げることはしないが、一連の論考に有形、無形の支持を与えて下さった哲学者、心理学者、教育学者の方々にもこの場を借りてお礼申し上げたい。足掛け 8 年の歳月におよぶ一連の論考の執筆過程において、労多くして報いのないこのような仕事に何度か挫折しか

認知心理学はどこへ行く？

けたが、こうしてともかくも執筆を完了することができたのは、ひとえに
こういう先生方の暖かい励ましがあったからである。

また、ここで批判の対象となった佐伯胖氏、戸田正直氏、波多野誼余夫
氏にも一言申し添えたい。筆者が3氏を批判したのは議論を展開し論旨を
明確にする上での都合であって、何ら個人的恨みがあったのことはない
ことは御理解いただきたい。日本では意見の対立が往々にして人格の対立
にまで発展する傾向があるがその愚は何としても避けたいと思っている。

波多野氏には一連の論考をお送りするなかで、しばしばコメントをいた
だいたし、筆者の知らない佐伯氏の論文も送っていただいた。批判を黙殺
することによってしか自らの正当性を維持しえない一般の認知心理学者と
は違って、御意見をいただけたことはたとえそれに同意できない場合でも
ありがたかったことをお礼方々申し上げておきたい。

戸田氏には原稿（但し、中垣 1987a の原稿）の段階から論文をお送りし
ているが、印刷論文になった暁に御意見をいただける旨連絡を受けている。
本論文によって一連の論考は終了する。そこで、この認知心理学批判に対
する初代認知科学会長の御意見を是非お聞きしたいと思っている（できれば
私信ではなく、公の文書の形で）。戸田氏の誠意ある応対を切に期待し
ていることをここで申し上げておきたい。

佐伯氏とは現在コミュニケーション不可能な人間関係にある。しかし、
筆者が一連の論考を書いたのは佐伯氏に対していささかも悪意があつての
ことではないということだけは御理解いただきたい。筆者が認知心理学批
判をしようと考えたとき、偶々認知心理学の表舞台にいたのが佐伯氏だっ
たというに過ぎないのである。ただ、一連の論考を振り返って見て、本論
文以外はあたかも佐伯批判であるかのような書き方をしたのは大変申し訳
なかったと思っている。筆者の不徳と筆の勢いで佐伯氏の人格を傷つける
ような表現が多々あったことを心からお詫び申し上げる。筆者としては佐
伯氏といつてもどこでも議論しあえるような人間関係を是非とも回復した

いと心から願っている。

最後に、本論考のような批判論文をそのまま掲載する機会を与えて下さった三田哲学会の編集部の方々にお礼申し上げたい。実は、最初の論考を別のところに投稿したとき「そういう有名な人物を批判するような論文は困る」と掲載を拒否された経緯があった。相互批判と論争を嫌う日本的学問風土の中で、本誌の存在は貴重であり、これからも自由な思想表明の場を提供しつづけていただくことを心から願っている。

引用文献・参考文献

- Boden, M. 1979 Piaget. Fantana. 波多野完治訳『ピアジェ』岩波現代選書 1980.
- Cheng, P. W. & Holyoak, K. J. 1985 Pragmatic Reasoning Schemas. *Cognitive Psychology* 17, 391-416.
- Donaldson, M. 1978 *Children's minds*. Norton.
- Evans, J. St. B. T. & Lynch, J. S. 1973 Matching Bias in the Selection Task. *Br. J. Psychol.* 64, 391-397.
- Gelman, R. 1978 Cognitive Development. *Ann. Rev. Psychol.* 29, 297-332.
- 波多野誼余夫 1982a ピアジェ派認知発達理論の現在 波多野完治監修 ピアジェ双書 5『ピアジェ派心理学の発展Ⅱ』国土社.
- 波多野誼余夫 1982b 演繹的推論 認知心理学講座 3『推論と理解』国土社.
- 波多野誼余夫 1982c 文化と認知発達〔下〕『サイコロジー』7, 64-69.
- 波多野誼余夫 1992 認知科学の「これから」『UP』No. 242 東大出版会.
- Johnson-Laird, P. N. 1983 *Mental Models*. Cambridge University Press.
- Kuhn, T. S. 1962 *The Structure of Scientific Revolutions*. The University of Chicago. 中山 茂訳『科学革命の構造』みすず書房.
- Mandler, J. M. 1983 Structural invariants in development (in) Liben L. S. ed. *Piaget and the Foundation of Knowledge*. Erlbaum.
- 中垣 啓 1987a 納得と理解—発生的認識論と認知心理学研究 (1)— 三田哲学会『哲学』第 84 集.
- 中垣 啓 1987b 論理的推論における主題化効果の発達的研究—4 枚カード問題の場合—『国立教育研究所研究集録』No. 15.
- 中垣 啓 1987c 論理的推論におけるみかけの“主題化効果”について『教育心

認知心理学はどこへ行く？

- 理学研究』35, 290-299.
- 中垣 啓 1988 視点と理解—発生的認識論と認知心理学研究 (2)— 三田哲学会『哲学』第86集.
- 中垣 啓 1989 抽象的4カード問題における課題変質効果について 『教育心理学研究』37, 36-45.
- 中垣 啓 1992 領域固有性と理解 (その一) —発生的認識論と認知心理学研究 (3)— 三田哲学会『哲学』第93集.
- 中垣 啓 1993 領域固有性と理解 (その二) —発生的認識論と認知心理学研究 (3)— 三田哲学会『哲学』第94集.
- Piaget, J. & Szeminska, A. 1941 *La genèse du nombre chez l'enfant* Delachaux et Niestlé. 遠山 啓他訳『数の発達心理学』1962 国土社.
- Rumelhart, D. E. 1979 *Analogical processes and procedural representation*. Center for Human Information Technical Report. No. 81, 三宅なおみ他訳 類推過程と手続き的知識表現『サイコロジー』No. 11, 66-69.
- 佐伯 胖 1982a 『学力と思考』第一法規.
- 佐伯 胖 1982b 『考えることの教育』国土新書.
- 佐伯 胖 1982c 心的モデルによる理解と学習 波多野誼余夫編 認知心理学講座4 『学習と発達』東京大学出版会.
- 佐伯 胖 1983a 認知科学の諸問題『科学哲学』No. 16.
- 佐伯 胖 1983b 『「わかる」ということの意味』岩波書店.
- 佐伯 胖 1986a 認知心理学をおもしろくするには『教育心理学年報』No. 26, 161-171.
- 佐伯 胖 1986b 『認知科学の方法』東大出版会.
- 佐伯 胖 1988 行動主義—認知科学との「和解」は可能か— 『人工知能学会誌』, 3, 398-410.
- 佐伯 胖 1993 「状況」から「教育」へ 『Coder News Letter』No. 26.
- 鈴木 忠・松寄洋子・佐伯 胖 1991 幼児の空間認識における課題布置の「切り取り」『発達心理学研究』1, 128-135.
- 戸田正直 1986 補稿「認知科学の方法」について 佐伯 胖著『認知科学の方法』東大出版会.
- Wason, P. C. 1966 *Reasoning* (in) B. Foss ed. *New Horizons in Psychology* Penguin.